

アンコンシャス・バイアスの悪影響と解消法

アンコンシャス・バイアスをそのままにしていると、性別、年齢、人種、国籍といった属性によって不利益を被る人も出てきてしまいます。それは、人種のあるつぼといわれるアメリカやヨーロッパの国々に限らず、日本でも同様なのです。

昨今問題視されているのは、偏見や思い込みにもとづく言動によって相手が不快になったり傷ついたりするだけでなく、そのネガティブな影響が、人のやる気をしばませたり、自信を奪ってしまったり、成長の芽を摘んでしまったりすること。

会社などの組織でアンコンシャス・バイアスがまかり通れば、従業員のモチベーションが下がってパフォーマンスが発揮できず、職場全体の生産性が落ちてしまったり、イノベーションが起これにくくなってしまったりするでしょう。そうすると、会社の成長は見込めません。さらに偏ったも

ののを見方をする人が上層部に多ければ、差別的な発言やハラスメントがまかり通り、人間関係も悪化してしまつてしまう。

想像するだけで怖くなるようなアンコンシャス・バイアスのマイナス面は、もちろん組織だけではなく個人の間でも発生します。

最近、「妻なら家事は完璧にやっただけで当然」「子ども世話はやっぱママじゃないとね」といったステレオタイプな価値観が、夫からも周囲からも押しつけられ、追い詰められている母親が増えているといった報道をよく目にします。

一方で、「男なら家族を守って養わなければ」「男なら途中で投げ出すな」など、従来からの「男らしさ」に束縛されて苦しんでいる男性も増えているといえます。

内閣府が策定した「第5次男女共同参画基本計画」でも、今後の働き方や暮らし方を変革するためにも解消が必要とされる事柄として挙げられていたアンコンシャス・バイアス。無意識の思い込みや偏見に気づくことは、多様性を認め合う世の中を実現するためにも大切です。そして周囲のため、相手のためだけではなく、実は自分自身の生きやすさにもつながっていくのです。

アンコンシャス・バイアスを解消する、今すぐできる3つのこと！

あなたも実践してみよう！

①大きな主語はなるべく使わない

「私たち日本人は…」[「だから女性は…」]「あの年代の人たちは…」など、意見を主張したい、聞いて欲しいという気持ちが強いときほど、人は「大きな主語」を使いがちです。

しかし、大きな主語は多様な属性を持つ人々をひとまとめに扱ってしまう言葉でもあります。アンコンシャス・バイアス発言につながりやすいので、注意が必要です。

②断定的な言葉が浮かんできたときは、ひと呼吸おいて

アンコンシャス・バイアスは、決めつけや断定的な言葉となって表れることが多いです。

「普通は…」[「常識的に…」]「…するべき」[「…に決まっている」といった発言をしそうになったら、それらを口にする前に、「それは本当に当たり前のこと?」「なんでそうすべきだと私は思うの?」と、自分に問いかけてみてください。

③相手の反応からサインを受け取る

話をしている相手の表情が急に曇ったり、会話に妙な間が生まれたり、最近であればオンライン会議中にビデオが突然オフになったり。もしかすると、アンコンシャス・バイアスを含んだ発言で、相手が傷ついているかもしれません。違和感を抱いたらそのままにせず、フォローしてみましょう。



「常識的に」とか「〇〇するべき」ってよく仕事場で言ってるなあ…。



私も子どもに「普通は」って、よく言っちゃってます…。

無意識バイアスに、遠慮なくダメ出しを



治部 れんげさん

プロフィール
ジャーナリスト、東京工業大学リベラルアーツ研究教育院准教授。中学生と小学生の母親。内閣府、東京都、豊島区などで男女平等に関する審議会委員などを務める。

都内公立中学校での出来事です。保護者会で校長先生が「お母さま」と何度も呼びかけていたことに違和感を覚え、数十名の保護者は女性だけではなく男性もいましたし、両親ではなく祖父母と思しき人もいたからです。実際、クラスには母親が不在で祖父母が子育てしている家庭も複数あります。

「お母さま」と話しかけた校長先生に悪意はなかったでしょう。けれど、「家で子育てするのは母親」というジェンダーに基づく無意識の思い込みは、

ジェンダーや血縁関係を限定しない言葉が使われることが多いです。先生の間にある知識ギャップを埋めるため、教育現場で無意識バイアスに関する研修をしてほしいです。

性別に基づく役割分担は、保護者の心に深く根づいています。小さな子どもを持つ首都圏の母親たちと座談会をした時のことです。ある人が言いました。「今は好きな習い事をさせているけれど、男の子だと、やっぱり塾とか行かせなきゃダメかな、と思ってしまつ」。別の人が言いました。「女の子だと、好きなバレエやピアノを思いきりやらせてあげようと思いますが、男の子はやっぱり勉強が気になる」。

こうした親たちも「男のくせに」とか「女のくせに」と、性別に基づく決めつけをあらかじめ口にしません。「ジェンダー」や「平等」に配慮した子育てに関する書籍がいろいろあります。それでも伝統的な価値観から離れるのが難しいところに「無

多様な家族形態の中で生きる子どもたちへの配慮に欠けていて残念に思いました。

似たようなことは、小学校でも起きています。「帰ったらお母さんに〇〇してもらってね」と繰り返す先生の言葉を聞き、小さい頃、母親を亡くしているお友達表情が曇っていた、と子どもから聞いた時は心が痛みました。

幼稚園・保育園や学校現場では、近年、多様な家族形態を踏まえた呼びかけが広がっています。多くの園や小学校低学年では「お父さん」「お母さん」ではなく「おうちの方」と

意識バイアスの根深い問題があるのです。

大切なのは、無意識バイアスは誰にでもあると知ること、そして自分自身のバイアスに気づくことです。例えばみなさんが「息子に言っていることを、娘にも言うだろうか」と考えてみて下さい。逆も同様です。

また、男女平等意識が強く、自分は差別などしない、と思っている人ほど「無意識バイアス」に気づかないことがあります。もし家族や友人から指摘を受けたら、立ち止まって考えて下さい。また、周囲の人が悪気なくバイアスがかかった発言をしていたら「それは違うんじゃない」と勇気を出して教えてあげてほしいですね。



「きめつけないで! 『女らしさ』『男らしさ』～みんなを自由にするジェンダー平等～」1～3巻 発行：汐文社